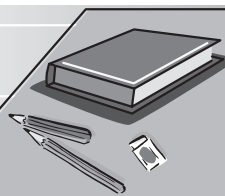


学生時代と図書館 75

—図書館と思い出—

石丸 久美子



「図書館」と考えた時、私が思い出すのは何故か本よりも図書館の周りの風景だったり、友人だったり、その他の要素であったりする。

子供の頃の図書館といえば、やはり近所の市立図書館のこども室だ。普通の公民館の上階にあったが、ガラス張りでそこから人々の往来をずっと飽きずに眺めていた。絵本や紙芝居の読みかかせ会が定期的にあるのも楽しかった。紙芝居の貸出ができ、家で弟を相手に紙芝居屋さんごっこをしたものだ。

小学生になると、こども室の横にあった、大人たちが真剣な顔をして調べ物や閲覧をしている参考室に興味を持ち、いつかあの辞書や新聞が並んでいる部屋に入ってみたいと思うようになった。その長い間の憧れは中学生になって叶えられた。大人にまじって、友達と一緒に夏休みの宿題をしたり、偉そうに辞書をめくったりしていたのを思い出すと可笑しい。

中学校の図書室の思い出は、何故か皆無だ。自分で本を買い始めた頃で、本屋に行くことが楽しく、大好きだった。高校の図書室では、同校先輩である手塚治虫さんの漫画を友達と順番に借りていた記憶くらいしかない。

大学に入ってから、図書館はもっぱら予習・復習、授業の合間の休憩場所となった。長距離通学で朝早く家を出ることもあり、時には半分お昼寝状態の時もあったが…。3年生の頃には、ゼミ発表やレポート作成をきっかけに、書庫で本を探し漁ることの面白さに目覚めた。

大学院では、それに拍車がかかり、論文作成のために、埃、インクまみれになりながら新聞、雑誌を探し、分析した。現在の専門分野につながるメディア分析を始めたのがこの頃で、フランスの雑誌、新聞を所蔵している図書館が少ないことから、様々な図書館に通い詰め、個性、特色のある専門図書館に行くことが増えた。公立では、大阪市立中央図書館には洋雑誌、新聞が多くあり、何度通ったか分からない。フランスの『エル』誌や広告、メディア関係の書籍で

は六甲アイランドにある神戸ファッション美術館のライブラリーに行った。ここではついでにファッション関係の展覧会を観覧したのも良い思い出だ。古い雑誌を求めて東京の閑静な住宅街にある大宅壮一文庫にも足を運んだ。通俗的とも言われる雑誌を独自の観点から膨大に個人収集することから始まった私立図書館なのだから凄い。このような図書館に所蔵されている雑誌は記号・言説分析にとっての重要な研究資料であり、大宅文庫はまさに宝庫である。

フランスの大学院留学中は、大学図書館でどれほどの時間を過ごしただろうか。ある先生には冗談で「学校に住んでいるのかい？」と言われるほど大学にいた。本の検索・請求、他大学からの取り寄せ、マイクロフィッシュの使い方は世話好きなウクライナ人の友人がすべて教えてくれた。ガラス張りで、外の景色が見えるのが心地良かった。疲れたら外の芝生に転がったり、カフェテリアに行ったりした後、図書館に戻る。その繰り返しだった。

パリの国立図書館は内部がSFか銀行金庫のようだった。日光が入り易いために図書館として失格との意見もあるが、子供の夢のような本型の建物を本当に建ててしまうのはフランスらしく、素敵だと思う。この図書館で、日本人の友人が、私が最初のフランス語学留学時に仲良く過ごしたものの残念ながら連絡先不明になっていた韓国人の友人と偶然知り合いになり、偶然見せた写真に私が写っていたことで、彼女と10年ぶりの感激の再会を果たすことができた。勿論、待ち合わせは国立図書館だった。

思い返してみると、図書館は、そこを通して、本の閲覧、貸出だけでなく、心温まる、私の人生の思い出がたくさん詰まった場所だと気付かされた。今後もどのような思い出が増えていくのか楽しみである。

いしまる くみこ（講師・フランス言語文化学）